

田中喬 建築論研究の軌跡 (2) —建築論の京都学派に関する基礎的研究 (4)—

正会員 ○川本 豊*1 同 市川 秀和*2

9. 建築歴史・意匠—6. 建築論

田中喬, 建築論, 京都学派, 阿藤伯海, 詩礼伝家

1. はじめに: 増田友也から田中喬へ

前回発表 (1) では、「建築論の京都学派」の系譜 (2) のなかから、未だ紹介されていない田中喬 (1934-2018) を取り上げ、まずその軌跡と題して、生い立ちから研究者・教育者としての生涯を概括し、第1報と位置付けた。

田中喬を研究テーマとする理由として、次の2点をあげておく。まず1点目として、すでに没後7年が経つ「田中喬」像を学術的に整理し位置付けることで、建築論の京都学派の持つ新たな可能性が開かれると考えたことに拠る。森田慶一・増田友也を筆頭に京都大学建築論研究の絶頂期に、前川道郎・加藤邦男・玉腰芳夫そして田中喬と居並び、思索と制作は展開した。ここに田中は独特な立場を築いた。

次いで2点目は、建築論の京都学派における重要課題の一つ「住まうこと」への問い (3) から、増田友也 (1914-1981) と田中喬を繋ぐ独自の視座が考えられる。増田友也に関しては没後40年以上が経過しており、その膨大な業績を通した多くの研究がなされていることは周知である (4)。独特な建築論に関する研究はもとより、プロフェッサーアーキテクトとして手掛けたモダニズム建築作品群を分析した論考も数多い。それを取り仕切った増田友也が遺した膨大な資料群は、近年ようやく整理され京都大学アーカイブとして公開が始まっている (5)。

その一方で、田中喬に関しては、前回にも述べたがその遺された資料は限られているのである。生前に、田中自身が敢えて著作以外の研究ノートなどを処分しようとしたことも伝えられている。こうした一次資料の限界を踏まえても敢えて増田から田中へと繋がる「住まうこと」の問いが重要であると考えたのである。

以上の2点を配慮しつつ、第2報となる本発表では、個人所蔵資料ではなく公刊されている書籍等を活用して、第1報にて指摘した田中喬の精神的背景となっておりと考えられる阿藤伯海 (1894-1965) との関係性を詳細に探ってみることとする。

2. 阿藤伯海: 臥龍庵—退隠の場所

阿藤伯海 (「簡」と号した、図1) は明治27年 (1894) 2月、岡山県浅口郡六條院村 (現在の岡山県浅口市) の豪農であった阿藤家の長男 (六人兄弟) として生まれた。三男である卓志氏が田中家に入り、田中喬はその次男 (四人兄弟のうち) として昭和9年 (1934) 8月に福山市にて生まれている。つまり阿藤と田中喬とは伯父—甥の血縁関係としてつながっていることはもちろんであるが、その生き様が与えた影響には大きなものがあると考えられる。両者には40年の年齢差があるが、このまさしく真中に増田友也が位置しているのである。



図1 阿藤伯海



図2 簡書「詩礼伝家」

そこで本章では清岡卓行氏の『詩礼伝家』 (6) の記述に拠りながら、阿藤の生き様を検討しておきたい。病弱であった阿藤は大正6年 (1917) に第一高等学校文科乙類に入学するが、その同級には川端康成がいた。留年を経て、大正10年 (1921) に東京

TANAKA Takashi: Trajectory of Architectural Theory Research Part 2

A Fundamental Study on Architectural Theory of Kyoto-School Part 4

KAWAMOTO Yutaka, ICHIKAWA Hidekazu

帝国大学文学部西洋哲学科に入学し、そこでは上田敏を敬愛し『上田敏訳詩集』の出版に尽力している。卒業した大正13年(1924)、30歳で京都帝国大学大学院に入学し、支那学の教授・狩野直喜(1868-1947)と運命的な出会いを果たし、漢詩へと傾倒し、終生の師として往来した。2年の大学院在籍後、法政大学講師を経て同教授となる。昭和16年(1941)に第一高等学校講師を経て同教授となり、漢文と作文を担当した。この年に、阿藤没後の頭彰に尽力したいいわゆる「藤門書生」8名(7)と出会っている。やがて戦争末期の昭和19年(1944)、50歳にして官職を辞し、12月に郷里に帰り、「臥龍庵」と自ら呼ぶ家居に退隠し漢詩三昧の日々を送ることになる。昭和40年(1965)4月4日午前4時4分に病没し、法名「臥龍庵大簡大居士」である。東京帝大同期の佐藤得二が、没後間もなく朝日新聞に寄せた追悼文を一部抜粋引用する。

彼が芭蕉、杜甫を好み、利休より遠州を好み、入明当時の雪舟を好み、フランス画風の輸入された当初の洋画を好み、天台の檀家でありながら奈良の古い六宗を、つまり大乘より小乗を愛したのは、すべて初初しき純朴さに傾倒したからである。京都大学の狩野直喜を師と選んだのも、狩野が阿藤を愛したのも、同じ純朴性への傾倒からであった。(pp.36-37)

「詩礼伝家」(前頁 図2)は、阿藤が没した5年後つまり昭和45年(1970)に作者清岡卓行(「藤門書生」の一人)が墓参を兼ねて浅口市鴨方の旧居を訪ねる私小説である。その時の案内役が田中喬の父・田中卓志氏である(図3~6)。一部引用する。



図3 伯海旧居 全景



図4 旧居 長屋門

阿藤先生は漢詩のなかで自分の住居についていろいろな呼びかたをしているが、その一つに虚白室という名前がある。書斎が客室、あるいは家全体をかたどったものということになろう。(p.93)

物がなく空虚でそのために日光が溢れる、という意味の部屋。それはそのまま、世の中において追い

つめられた自分の感受性しか信じていない、そんな頑な孤独のかたちをかたどることができるはずである。(p.95)



図5 臥龍洞(母屋)



図6 虚白室(書斎)

黒い門をくぐって玄関に向う途中で、傍に眺められる樹齢三、四百年ほどのその松がなんとなく気になっていた。「先生はあの松を、ほんとうに大切になさっていらしてね」巨大な老松は自分の重たさをいくぶん持てあましたように、幹が斜めに大きく傾いており、その傾いた何箇所かに竹の支柱がほどこされていた。(pp.97-98)

「兄はね、戦争中、鎌倉の家をたたんでここへ戻ってこようとするとき、年をとった母とあの松を慕って帰るんだよって言ってました」田中さんはさらに遠い昔を懐かしそうに思い浮かべた。(p.100)



図7 扁額「臥龍洞」



図8 扁額「虚白室」

母屋の玄関には恩師・君山狩野直喜が「臥龍洞」と揮毫した扁額がかかっている。しかし阿藤は、敢えて「臥龍庵」と称したのである(図7・8)。その臥龍庵と虚白室の間には、上記引用文からすると、老松が昭和45年当時はまだ在ったようであるが、すでに枯れて現在はなくなったままで、往時の面影はない(図9参照)。



図9 臥龍松



図10 詩碑と頭彰碑

学部教授に就任し、平成15年(2003)に69歳で教壇を離れ、退隠の身となったのである。

前頁「図11」は、京大退職年度となる平成8年度(1996)の総合人間学部における「生活・環境構成論」の初回講義(4月17日)に配布されたものである。

図の下部には大地があり、上部は天空が覆っている。大地の上には小さな庵がありそこに住む人が描かれており、庵の前には松の木が立っている。そして、大地と天空の間にこの松の木と響き合うように大きく〈建築の木〉が描かれている。

引用は令和元年(2019)に書かれた田中の高弟である西垣安比古京都大学名誉教授による追悼文(8)の一部である。天空の下に住まう人が建築論を構想することを示しているとされる。大地の上、木の根元に描かれた(円で囲った部分：発表者挿入)、住まい(庵)とその傍らに屹立する松の木は、さきに見た阿藤伯海旧居の臥龍庵と臥龍松がそこに映っているとみなしてもいいのではないだろうか。

4. おわりに：次の展望として

この一連の発表の目的は、建築論の京都学派の中でも、これまで注目されてこなかった田中喬を学術的な対象として検証することにある。それは、何よりも田中の著作等にもみる漢詩や詩歌への不可解さと難解さに起因するのではないだろうか。しかし田中の「住まうこと」への問いや風景への眼差しについては、師・増田友也を直截に継承していることは間違いなく、今後その検証が必要になってくることは疑いない。そのための一助として、まず田中の研究の軌跡として人物像を示し、次いでその思想的背景の形成として深く影響を与え続けた伯父・阿藤伯海を今回取り上げた所以である。

田中は学位論文でウィトルウィウスやアリストテレスを扱ったが、後半期には斎藤茂吉に傾倒し、その短歌を手掛かりに精緻な建築論を思索したことで知られる。そこで、これ以前の比較的早い時期の論文等についての考察を次の課題としたい。

〔参考文献〕

- ・川本豊(2021)「住まいの心性と旅の風景—『海道記』を中心に—」『北陸都市史学会誌』第26号。
- ・清岡卓行(2010)『詩礼伝家』復刻版、財団法人吉備路文学館。(三部作初出：文藝春秋1975。四部作初版：講談社文芸文庫1993、復刻版はこれに拠る。)
- ・定金恒次(2019)『阿藤伯海の世界』岡山文庫316、日本文教出版。
- ・狩野直禎監注(2019)『狩野君山の阿藤伯海あて尺牘集』法蔵館。

〔註〕

- (1)「田中喬 建築論研究の軌跡」(2024)『日本建築学会近畿支部研究報告集』第64号・計画系。
- (2)市川秀和(2014)『「建築論」の京都学派—森田慶一と増田友也を中心として—』近代文藝社。
- (3)川本豊・市川秀和(2021)「日本古典文学にみる「住まうこと」の建築論的考察」『日本建築学会計画系論文集』第86巻 第787号。
- (4)市川秀和・田路貴浩編著(2024)「特集：増田友也」『建築論研究』第3号。
田路貴浩編著(2023)『増田友也の建築世界』英明企画編集など。
- (5)京都大学桂図書館アーカイブ「増田文庫」など。
- (6)同書よりの引用(抜粋)箇所は頁数のみ記す。
- (7)「藤門書生」は下記の8名である。
青山行雄、清岡卓行、小池暎一、高木友之助、三重野康、村上博之、牟田口義郎、山本阿母里
- (8)西垣安比古(2019)「田中喬先生を悼む」『京大建築会会報』Vol.84。

〔図版出典〕

- 図1「阿藤伯海の文学と藤門の書生たち展」(2008)フライヤー、財団法人吉備路文学館。
図2『詩礼伝家』復刻版、財団法人吉備路文学館。
図3～8、10 川本撮影。
図9『阿藤伯海旧居』パンフ、浅口市教育委員会。
図11 藤原学(2019)「建築の木—田中喬先生追悼」『建築論研究』第1号。

*1 福井工業大学市川研究室 博士(工学)
*2 福井工業大学 教授・博士(工学)

Ichikawa Labo., Fukui University of Technology, Dr. Eng.
Prof., Fukui University of Technology, Dr. Eng.